

The Longest Journey における Rickie Elliot の 強迫観念に取りつかれた死

林 涼 子

I

1907 年 4 月に出版された E. M. Forster の 2 作目となる長編小説 *The Longest Journey* の主人公 Rickie Elliot は、相次ぐ両親の死によって、自らの「エディプスコンプレックス」を克服できないまま成人する。幼少期の Rickie は、夫の心ない仕打ちに耐える不幸な結婚生活にもかかわらず、愛らしい女性であった母を心から愛する。その一方で Rickie は、母を精神的に苦しみ、一人息子である自分のことも愛そうとしない父を心から憎む。父は息子の足の欠陥が自分ほどひどくないことを残念に思いながら、おもしろがって息子を本名の 'Frederick' ではなく 'rickety' (ぐらぐらしているの意)をもじって 'Rickie' と呼ぶ。両親に対する相反する感情は、必然的に Rickie を母の方へと向かわせる。こうして、足の不自由な Rickie は生活面でも精神面でも母に依存する。そしてこの Rickie の母への依存心が、彼の内面に「母親コンプレックス」を形成させる要因となる。J・ヒルマンによれば、「母親コンプレックスは、あらゆる感情の中でも最も恒久的で、極めて扱いにくいものの基礎にあるものである。この意味で、ユングが述べたように母親は運命」(195)なのである。Rickie の短い人生を左右するのも、母親しかも亡き母親なのである。厳密に言えば、Rickie の亡き母親への過度の執着心が、彼の運命を決定づけるのである。

亡き母親への Rickie の過度の執着心の背後には、母の死に対する彼の贖罪の意識が働いている。15 歳の時、Rickie は父の死からわずか 11 日後

に母も失う。母の突然の死は、彼の心に深い傷を残す。風邪を引かないように外套を着て外出するように言う母の言葉を無視した Rickie が帰宅すると、母はすでに死んでいた。彼は、自分が母の言いつけに背いたことと母の死を結びつけて罪悪感を感じる。そこで、自らの罪をつぐなうために、Carola M. Kaplan が指摘するように “[Rickie] wishes to bring her [his dead mother] back to life” (53) のである。そして “Indeed, the novel offers Rickie two opportunities symbolically to do so” (53) のである。

The first opportunity offers itself to him in the figure of Agnes, who misleadingly reminds him of his dead mother. The second opportunity presents itself more ambiguously in the form of his half-brother, Stephen. (53)

本稿では、主人公 Rickie Elliot の亡き母親への心情に着目して、彼の母親への過度の執着心が、妻 Agnes と「片親違いの弟」Stephen との人間関係を築くうえでいかに彼に過ちを犯させたかを検討し、その結果として迎える彼の死には一体どんな意味があるのかを考察していきたい。

II

Rickie は、Agnes Pembroke との結婚によって彼女を通して亡き母親を「生き返らせる」最初の機会を手に入れる。しかし、“The marriage between Rickie and Agnes is a catastrophe” (78) と Bonnie Blumenthal Finkelstein が指摘するように、Rickie は Agnes との結婚によって精神的に追い詰められていく。自分の母親を愛しているからといってすべての女性を信じてしまうという世間知らずのせいで、Rickie は軽率にも Agnes との結婚を決めてしまう。確かに Agnes の外見は美しいが、その内面は、年の離れた兄 Herbert 同様に実社会における物質的な成功すなわち富や地位や名声を手に入れることにのみ価値を見いだす俗物であり、古代ギリシャ人のような鍛え上げられた美しい肉体とは対照的にその内面には弱い

ものいじめをして喜ぶような卑劣さを持つ亡き婚約者 Gerald にこそふさわしい女性なのである。結婚後、想像力豊かで傷つきやすい Rickie を、Agnes は “impractical” とみなして軽んじるのである。

Rickie の Cambridge の友人で哲学の特別研究員を目指している Ansell は、その同性愛気質に根ざした極度の女性嫌悪から、Cambridge が何よりも尊ぶ精神性のかけらもない Agnes の本質を看破し、彼女が Rickie の “the subjective product of a diseased imagination” (17) に過ぎないと断言する。ここで Ansell は、S. P. Rosenbaum が “how Rickie’s idealising of people prevents him from judging their real worth” (235) と指摘するように、対人面における Rickie の問題点を見抜いている。しかし、Sawston での Agnes と Gerald の抱擁の場面を偶然目撃していた Rickie は、この美しい恋人たちの中に、Cambridge の本と知識の世界では知り得ない生身の男女の愛を見だし、彼らを神聖な恋人たちとして理想化してしまう。そのうえ彼は、自分は彼らに値しない人間であるとまで考えるのである。この Rickie の心理の背後には、肉体的な欠陥を持つ自分自身へのコンプレックスがある。Wilfred Stone の言葉を借りれば、“he grows up with a profound sense that he is ugly and no good” (98) からである。この自分の肉体に対する負い目が、Rickie に Agnes と Gerald を過度に美化させてしまうのである。

突然の Gerald の事故死によって、Rickie は「女神」のような Agnes の婚約者になる。婚約期間中の Agnes と Rickie の関係性は、Madingley の近くの小さな溪谷で Agnes が膝の上に Rickie の頭をのせて座っている姿に象徴されている。“To be taken on the lap is, like being taken to the breast, a symbolic expression for adoption of the child, and also of the man, by the Feminine” (98) と Erich Neumann が *The Great Mother* のなかで述べているように、彼らは「母」と「息子」なのである。Agnes は常に Rickie を「坊や」と呼び、彼の生活に干渉する。また、Rickie が *Holborn* 誌の編集者と面談する際に、“Why didn’t you put on a boiled shirt!”

(142) と彼の服装に関して口をはさむ Agnes の姿は、彼の亡き母親が彼に外套を着ていくように言った姿とも重なる。

Agnes を通じて彼の亡き母親を「生き返らせ」ようとする Rickie にとって、「母親」のように振る舞う Agnes は、彼の願望を満たしてくれる女性のように思える。しかし、Agnes は、Rickie の亡き母親の代わりにはならないのである。確かに Rickie の母親と Agnes には共通点がある。Rickie の母親は駆け落ち相手の Robert を海水浴中の事故で亡くし、Agnes は婚約者 Gerald をフットボールの試合中の事故で亡くす。両者とも、愛する人の死によって人生における「もっとも大切なこと」が終わるのを経験する。また、Rickie の母親が感情の激しい動揺を恐れて息子との間に少し距離を置いたように、Agnes も動揺させられることが嫌いで、Rickie が真面目な話をしようとするとか化してしまう。しかし 2 人には決定的な違いがある。Rickie の母親は、愛人との子供 Stephen を産んだことで顔も性格も夫似の Rickie を心から愛せるようになり、息子にとってもかけがえのない存在となることができた。しかし、Agnes は「一度は愛するが、一度しか愛さないタイプ」なのである。だから、親しくなる手段として感情を重んじる Rickie の努力は報われない。Rickie にとって Agnes は、より深い母子の情愛を育んでいこうとしていた矢先に突然他界して手の届かない存在となってしまった母親の身代わりなので、彼女と心を通わせたいと切望する。一方「一度しか愛さない」Agnes にとって、Rickie は単なる Gerald の身代わりでしかないので、Rickie の願いは叶わないのである。Rickie にとって、亡き母親の代わりに妻と自分との精神的な絆を深めることこそが、妻を通じて亡き母親を「生き返らせる」ことなのである。

しかし、Agnes は Rickie の感情を無視することで彼の精神を硬直させていく。さらに、Sawston School でラテン語の助教師の職を得た Rickie は、Eton 校のような伝統校にすべく Sawston School を組織化し体系化し生徒たちの団結心を高めることにしか興味のない義兄 Herbert の野心に巻き込まれて、仕事への情熱も失い自分自身を見失っていく。Agnes

を“Medusa in Arcady”(178)にたとえる Herbert と Rickie の同僚教師 Mr. Jackson は、彼女の本質を鋭く突いている。“The petrifying gaze of Medusa belongs to the province of the Terrible Great Goddess, for to be rigid is to be dead”(166)と Neumann が述べているように、“Medusa”である Agnes との生活で精神を硬直させられた Rickie は Sawston で死んだも同然なのである。創作こそ実生活と彼の豊かな感受性の折り合いをつける唯一の方法にもかかわらず、Rickie は物語を書くことを断念してしまう。

Agnes の産んだ赤ん坊が生後まもなく亡くなるが、それは Agnes が“Medusa”のように“the womb of death”(166)を持っているからに他ならない。さらに Rickie と Agnes の赤ん坊が亡くなることには、実は Rickie が結婚に適さない人間であることも関係している。第7章に“*But one night he [Rickie] dreamt that she [Agnes] lay in his arms. This displeased him. He determined to think a little about Gerald instead. Then the fabric collapsed*”(66)という、さりげないが衝撃的な記述がある。つまり Ansell の女性嫌悪が彼の同性愛気質を暗示するように、Rickie の遺伝性の足の欠陥は彼の同性愛気質を暗示する。Forster がこの小説を執筆していた Edward 朝において、同性愛は罪であった。またこの時代の科学は、同性愛を人類の進化を後退させるものとみなしていた。すなわち同性愛は生殖不能であり、人類の子孫を絶え間なく生み出していくのは異性愛からなのである。婚約後に Rickie は自らの気質に気づくが、この恥ずべき欲望を抑圧してしまう。妻が妊娠すると、Ansell が自ら描くマンダラ(四角と円の組合せの一番内側に存在するもの)に意味を見いだすように、Rickie は生まれてくる子供に意味を見いだす。しかし子供の死によって、Rickie は父親になる機会を永遠に奪われる。以後、彼は人類の存続という新たな考えに取り憑かれる。

III

生まれたばかりの娘の死後、Rickie は妻 Agnes との Sawston での生活を捨てて「異父弟」Stephen と Wiltshire で暮らすことを選ぶ。Rickie は、伯母の Mrs. Failing から Stephen が彼の「片親違いの弟」であることは知らされている。しかし底意地の悪い伯母は、Stephen が彼の「異父弟」なのかそれとも「異母弟」なのかは明かさないのである。このため、Rickie は Stephen を憎むべき亡き父の不倫の子だと思い込み、妻の言いなりになって Stephen と関わりを持たないようにする。Agnes の中傷の手紙によって Mrs. Failing の邸を追い出された Stephen が、Rickie に自分たちが「片親違いの兄弟」であるという事実を伝えにやって来た時も、彼は Stephen に会おうとはしない。しかし Ansell から Stephen が最愛の亡き母親の息子であることを告げられると、Rickie は Stephen を通じて“... she [Rickie and Stephen's mother] whom he [Rickie] loved had risen from the dead, and might rise again” (250-251) と確信する。Kaplan が指摘するように、Rickie にとってこれが亡き母親を「生き返らせる」ための二度目の機会になる。そのため、Agnes から小切手を渡されて厄介払いされそうになったことに自尊心を傷つけられて腹を立てた Stephen が、泥酔状態で再び Sawston に戻ってきて暴れた時、Rickie は階段から落ちそうになった Stephen を助ける。この Rickie の行為は、結婚生活で抑圧されていた彼の、妻と義理の兄に対する初めての抵抗でもある。

Wiltshire での弟との生活は、Rickie の創作意欲をかきたてる。Rickie は男女が会って幸せになる長編小説を完成させ、伯母に “In literature we needn't intrude our own limitations. I'm not so silly as to think that all marriages turn out like mine. My character is to blame for our catastrophe, not marriage” (277) と語る。これは、Rickie が期せずして Agnes との不幸な結婚という現実から学んだことである。Rosenbaum は、作家としての Rickie の問題点は “how to make his imaginative conceptions fully real” (235) であると述べているが、死を目前にして Rickie はこの問題点を克

服しつつある。その証拠にこの長編小説は彼の死後成功を収める。

しかし、Rickie は Rosenbaum が指摘する人間としての問題点すなわち “how to meet the full objective reality of other people without ignoring or idealising them” (235) をまだ克服していない。第 31 章で、この Rickie の問題点は Stephen によって次のように指摘される。

You don't care about *me* drinking, or to shake *my* hand. It's some one else you want to cure — as it were, that old photograph. You talk to me, but all the time you look at the photograph. (255)

そして、Stephen は “that old photograph” すなわち彼と Rickie の母親の写真を引き裂く。写真を引き裂くことで Stephen は、彼らの亡き母親の身代わりにされることを拒絶する。

それでは Stephen とは一体どんな人間なのか。彼は粗野で乱暴者で、たとえ禁酒の約束をしていても飲みたくなれば平気で酒を飲む人間である。しかしその一方で Ansell が見抜いたように、Stephen は素朴で率直で、たとえ飢え死にしようとも自分が愛してもいない人間から金 (Agnes が渡そうとした小切手) を受け取るくらいなら死んだほうがましだと考える男でもある。それに Cambridge で教育を受けた Rickie や Ansell のような知性や教養はないが、Stephen には人間や物事の本質を見抜く知恵が備わっている。その知恵により Stephen は、Pembroke 兄妹は Rickie を必要とはしておらず彼のことを “beastly” にしているだけだ、だから “Come with me as a man” (257) と言うのである。

このように Stephen は長所も短所も持つ生身の人間で、決して Rickie と彼自身の亡き母親の身代わりなどではない。しかし、Rickie は Stephen の抗議にもかかわらず、彼を彼らの亡き母親の神聖なイメージで理想化するという過ちを改めようとはしない。このため Rickie は、愛する母親の息子である Stephen が禁酒の約束を破るとは思いもしない。だから Rickie は、Stephen に裏切られたことがわかると次のように絶望する。

[T]he woman he loved would die out, in drunkenness, in debauchery, and her strength would be dissipated by a man, her beauty defiled in a man. She would not continue. (282)

しかし Rickie は酔い潰れて線路に寝ている Stephen を発見すると、うんざりしながらも助け、代わりに自分の命を犠牲にする。皮肉にも死の瞬間、Rickie は Stephen が約束を破って飲酒する男であることを受け入れるのである。ありのままの Stephen を受け入れることで Rickie は、Rosenbaum が指摘する人間としての問題点をも克服する。世の中の現実と向き合うことを恐れていた Rickie は、死の瞬間に初めて目の前の現実と向き合い「弟」への肉親の情から Stephen を救う。

IV

伯母の Mrs. Failing は、知人宛ての手紙の中で死んだ Rickie のことを “one who has failed in all he undertook; one of the thousands whose dust returns to the dust, accomplishing nothing in the interval” (282) と書く。義兄の Mr. Pembroke も “Yet death is merciful when it weeds out a failure” (287) と考える。しかし果たして Rickie の死は、Mrs. Failing や Mr. Pembroke が考えるようにこの世で何も成し遂げずに死んでいった失敗者としての死なのか。

Alan Warren Friedman は、“Rickie’s death is sudden, but neither capricious nor inappropriate, for in this book whose dedication reads ‘Fratribus’ it allows for the birth of his brother’s daughter, who is named for his mother” (189–190) と述べている。潜在的な同性愛気質を有する Rickie は、彼の生まれたばかりの娘の死が示唆するように直接的に人類の存続に関与することはできない。しかし Friedman の指摘にもあるように、Rickie は Stephen を救うことで彼の娘 Lucy の誕生に間接的に関与し、ひいては Lucy やその未来の子孫を通じて人類の存続にも間接的に関与することになる。Rickie ではなく Stephen が生き残る理由の一つは、農夫であっ

た父親 Robert からがっしりとした体格を受け継いだ Stephen が生殖に
適応できる異性愛者だからである。Stephen は彼の子孫を通じて、彼と
Rickie の母親とその愛人 Robert の血筋を継続させていくのである。Rickie
自らが “Let me die out. She will continue” (251) と願うように、自らの
死によって、亡き母親は Stephen の子孫の中で生き続けていくのである。
Mircea Eliade は、死の概念を *Myths, Dreams and Mysteries* のなかで次のよ
うに定義している。

Death is not, in itself, a definitive end, not an absolute annihilation, as
it is sometimes thought to be in the modern world. Death is likened to
the seed which is sown in the bosom of the Earth-Mother to give
birth to a new plant. (188–189)

Rickie の死は、いわば、Stephen の子孫を生みだすための “seed” なので
ある。

一方、夢の中の母親の “...let them [the Elliots] die out” (193) という
願い通りに、Rickie は自らの死によって遺伝性の足の疾患を持つ Elliot
家の血筋に終止符を打つ。Wagner のオペラでは “...good figures tread
upon good feet and bad beings walk poorly” (261) と Marc A. Weiner は
述べる。なぜならば、“The foot is one of the features of the body with a
long iconographic tradition in European culture” (261) からである。これ
はこの小説にも当てはまる。“good figures” である Robert と Stephen
は、しっかりと大地を踏みしめて歩く。一方、“bad beings” である Elliot
姉弟 (Rickie の父親とその姉の Mrs. Failing) は、足をひきずってよたよ
たとしか歩けない。“good figures” である Robert 父子は、物事に対する
「事実」を述べる。つまり彼らは実生活の現実常に立ち向かっているの
である。しかし、“bad beings” である Elliot 姉弟は、物事の「見解」は述
べるが「事実」は述べない。つまり彼らは実生活の現実を恐れ常に目を背
けているのである。Rickie も父親や伯母同様に、死の瞬間まで亡き母親の

面影をひきずって現実には立ち向かおうとはしない。しかし、目の前の現実を受け入れた死の瞬間、列車はまず Rickie の不自由な左足を切断する。これは、死の瞬間、Rickie が Elliot 家からも抑圧していた自身の「恥ずべき欲望」からも解放されたことを象徴する。

さらに Stephen が生き残るもう一つの理由は、Tony Brown が指摘するように “Stephen is seen by Forster as the prototype of a still-evolving race” (110) からでもある。“the prototype of a still-evolving race” である Stephen は、大地の輝くばかりの美しさや夜の神秘を本能的に感じとる力を持っている。彼は Ansell が言うところの “the Spirit of Life” (181) を、Wiltshire の自然の中に見いだしているのである。彼のこの力は、夜、戸外で就寝して大地との一体化を経験することで、彼の幼い娘 Lucy にも確実に受け継がれていく。Cadover 邸の彼の屋根裏部屋に飾られている “the picture of the Demeter of Cnidus” が示唆するように、この小説の中で、4月生まれの Stephen は “Demeter the goddess rejoicing in the spring” (255) のいわば「息子」である。Erwin Rohde は “Demeter, in whose name there was early a tendency to recognize a second ‘Mother Earth,’ in many places took the place of Gaia in religious cult” (161) と述べている。また、Eliade は “... it [the Earth-Mother] takes in all the myths dealing with Life and Death, with Creation and generation, ...” (185) と述べている。Stephen は、Rickie の犠牲のもとに第二の母なる大地でもある Demeter の繰り返される “Life and Death” や “Creation and generation” に深く関わっている。

この小説の中で Forster は、大地から離れて郊外のアスファルトの上で暮らす Pembroke のような人々ではなく、Stephen や彼の娘のように大地に根を下ろして自然と調和して暮らす人々にこそイギリスの未来を託したいと望んでいる。Forster にとっての “true England” とは Wiltshire に代表される “countryside” であり、そこに彼は “a sense of companionship” (105) を感じている。なぜならば、J. K. Johnstone が指摘するよう

に “The countryside, Forster believes, may put a man in touch with his forbears, reminding him that he is one with them and, further, that life may go out from him to the unborn” (105) からである。第 35 章の “The dead who had evoked him [Stephen], the unborn whom he would evoke — he governed the paths between them” (289) という記述にあるように、Stephen はイギリス人の「過去」と「未来」とを繋ぐ橋渡しの役目を担っているのである。

また Wiltshire での Stephen は、踏切で轢かれそうになった少女を救い、農場労働者たちを搾取する横暴な農場管理人に立ち向かう「英雄」でもある。農場の統治者であった亡き Mr. Failing の社会主義の著作の読者であった Stephen は、無意識のうちに、労働者たちの間に労働組合の意識を芽生えさせる。Stephen はまた Mrs. Failing に対して、小作人の粗末な家の修繕、下働きの少年の賃金の値上げ、橋の建設(事故の多い踏切りの代わりに)といった筋の通った改善要求も行なう。これらの改善は、Mrs. Failing の死後、Cadover 邸と農場を引き継いだ Silt 家の人々によって実行される。Stephen は社会主義者ではないが、彼の改善要求は、結果的に社会的弱者である農場労働者たちの生活によりよい幸せをもたらす。こうして Stephen は、理想主義者で実務には不向きであった亡き Mr. Failing の理想の実現にも一役買うのである。それゆえに、Tariq Rahman は “Rickie’s sacrifice has not been in vain. He has died in order to save the person who can guarantee a better future for those who have to live repressed and incomplete lives in the present age” (46) と Rickie の死を価値ある犠牲として捉えている。

Stephen は、その庶出の生まれゆえに Edward 朝の因習的な社会ではアウトサイダーである。彼の “here am I and there are you” (244) という単純明快な信条は、彼が階級とは無縁の存在であることを示している。だからこそ第 35 章で Stephen は、自分たちこそが “the great world” であると考えた Sawston の人々の代表である Mr. Pembroke に対して、部屋

の窓から見える Wiltshire の自然を指差しながら次のように言い放つことができるのである。

“Look even at that [the quiet valley] — and up behind where the Plain begins and you get on the solid chalk — think of us riding some night when you’re ordering your hot bottle — that’s the world, and there’s no miniature world. There’s one world, Pembroke, and you can’t tidy men out of it.” (286)

ここで Stephen は、Ansell の “There is no great world” (63) という言葉の正当性を期せずして Mr. Pembroke に実証してみせる。

一方因習的な社会の内側に生きる Rickie は、亡き母親への愛に執着し続けながら、Cambridge の観念的な価値観と Sawston の世俗的な価値観の間で苦悩する。その結果、Rickie は妻との生活を捨てて弟との生活を選択する。Rickie のような社会的存在である人間にとっては、自らのこの選択は因習への反逆行為なのである。だから、反逆者 Rickie は命を落とすことになる。John Colmer が “Forster was unable to imagine any future for a liberated Rickie in an Edwardian novel, or indeed in Edwardian society” (82) と指摘するように、作者 Forster にとっても因習から自由になった Rickie を描くことは考えられないことだった。しかし、Forster は Rickie の不器用な生き方を否定してはいない。

Forster はこの小説の第 28 章の “the coinage chapter” の中で、むしろ Rickie の死を弁護している。Thomas L. Jeffers が “Rickie’s soul has traded in coin bearing his mother’s image and has gone bankrupt with the revelation of her ‘immorality’” (150) と述べているように、Rickie の魂は愛する亡き母親の顔を打ち抜いた通貨で支払いをして破滅する。しかし神の顔が刻まれたもう一つの貨幣では、人間の魂は愛や世俗的な楽しみを手に入れることもできなければ破産という修業をすることもできないのである。P. N. Furbank の “Christian belief was not now an issue for him [Forster]” (156) という記述が示すように、この小説を出版した 1907 年

までには、Forster はすでにキリスト教への信仰心を失っていた。Forster は、信仰心の代わりに “a human-centered idea” (156) に重きを置いていた。Laurence Brander が指摘するように、第 28 章の締め括りの一文 “Will it really profit us so much if we save our souls and lose the whole world?” (227) は、“the humanist paradox” (119) である。そして第 26 章の、Mr. Pembroke のような人々が死んでも “... nothing will have happened, either for themselves or for others” (209) という一文には、どんなに世俗的な成功を手に入れようとも彼らの存在の虚しさが込められている。世俗的な成功を追い求めて生きる Mr. Pembroke のような生き方よりも、亡き母親の面影に取り憑かれて苦悩して死んでいく Rickie の生き方にこそ、Forster は人生の価値を見いだしているのである。この小説の中で、Rickie は自らの死によって自らの存在理由を示すのである。

註

* 本稿は、大学院英文学専攻協議会第 35 回研究発表会(2002 年 12 月 7 日、於津田塾大学)における口頭発表の原稿に加筆訂正をしたものである。

引用文献

- Brander, Laurence. *E. M. Forster: A Critical Study*. London: Hart-Davis, 1968.
- Brown, Tony. “E. M. Forster’s *Parsifal*: A Reading of *The Longest Journey*.” *E. M. Forster: Critical Assessments*. Volume III. Ed. J. H. Stape. London: Helm Information, 1998. 92–114.
- Colmer, John. *E. M. Forster: The Personal Voice*. London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Eliade, Mircea. *Myths, Dreams and Mysteries: The Encounter between Contemporary Faiths and Archaic Realities*. Trans. Philip Mairet. New York: Mythos, 1960.
- Finkelstein, Bonnie Blumenthal. *Forster’s Women: Eternal Differences*. New York and London: Columbia University Press, 1975.
- Forster, E. M. *The Longest Journey*. Ed. Elizabeth Heine. London and New York: Penguin, 1989.
- Friedman, Alan Warren. *Fictional Death & The Modernist Enterprise*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Furbank, P. N. *E. M. Forster: A Life*. San Diego, New York and London: A Harvest Book, 1978.

- Jeffers, Thomas L. “Forster’s *The Longest Journey* and the Idea of Apprenticeship.” *E. M. Forster: Critical Assessments*. Volume III. Ed. J. H. Stape. London: Helm Information, 1998. 139–155.
- Johnstone, J. K. *A Study of E. M. Forster, Lytton Strachey, Virginia Woolf, and their Circle*. London: Secker & Warburg, 1954.
- Kaplan, Carola M. “Absent Father: Passive Son: The Dilemma of Rickie Elliot in *The Longest Journey*.” *E. M. Forster*. Ed. Jeremy Tambling. London: Macmillan, 1995. 51–66.
- Neumann, Erich. *The Great Mother*. Trans. Ralph Manheim. Princeton: Princeton University Press, 1955.
- Rahman, Tariq. “Edward Carpenter and E. M. Forster.” *E. M. Forster: Critical Assessments*. Volume IV. London: Helm Information, 1998. 40–57.
- Rohde, Erwin. *Psyche: The Cult of Souls and Belief in Immortality among the Greeks*. London: Routledge & Kegan Paul, 1925.
- Rosenbaum, S. P. *Edwardian Bloomsbury*. London: Macmillan, 1994.
- Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain*. London: Oxford University Press, 1967.
- フォン・フランツ、M-L. ジェームズ・ヒルマン. 『ユングのタイプ論』 角野善宏訳、東京: 創元社、2004.
- Weiner, Marc A. *Richard Wagner and the Anti-Semitic Imagination*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1995.